

蛇なまの劍けん — おほかたの うつつは夢になしはてつ—

有吉朝子

あらずじ

時は中世。栄耀栄華を誇った平家が勢いを失い始めた頃から、彼の一族を滅亡させた源頼朝が、晴れて征夷大將軍となるまでの出来事。

場所は二ヶ所、京のみやこと、相模国鎌倉。みやこには、平氏により「四ノ宮」の地位に追いやられた皇子が、母親と共に不如意な生活を強いられている。

ところがある日、平家を恨む王族、以仁王が出した宣旨を受けて、木曾義仲の軍勢がみやこに攻め寄せる。平家は住まいである六波羅を襲撃され、ついに逃亡。平氏の娘を母に持つ当代の帝もまた、「三種の神器」と共に西国へ逃げ下る。帝の不在を解消するため、朝廷は早々に、四ノ宮を次の帝と決定。ところが、帝のしるしである「三種の神器」、特にヤマタノオロチの体からスサノオノミコトによって取り出された「草薙の劍」、またの名を「蛇の劍」という聖なる劍が欠けたままでは、帝の正当性は保証されない。

一方、鎌倉には源頼朝の娘、初と、その許嫁である義高が暮らしている。義高の父親は木曾義仲。表向きは許嫁だが、義仲の実力に怯える頼朝が出させた人質、とも考えられた。

「蛇の劍」を取り返すため、四ノ宮の祖父、法皇に命じられた義仲は、平氏を追って備中水嶋に。だが戦に負け、「蛇の劍」も取り返せなかった。法皇は義仲を叱責、逆上した義仲は彼の御所を攻撃する。

慌てた法皇は頼朝の援護を求め、四ノ宮を鎌倉に差し向けるのだった。

法王の要請を受け、頼朝は源義経を使って木曾義仲を追討。逆賊となった父親の死—息子義高は窮地に陥る。その義高を慕う頼朝の娘、初もまた、同じように苦しむのだった。

劍の欠けた帝、四ノ宮の運命に、初と義高の恋、頼朝を敵と狙う木曾の残党、初の幸せを願う母親の御台、頼朝と法皇の駆け引き、いくつもの関係が交錯し、物語は思わぬ方向に進んでいく。

三人の若者の運命は？ そして四ノ宮は、「蛇の劍」を手にすることができのだろうか…？

《登場人物》

女性 8名

男性 10名

四ノ宮 十代前半、四番目の皇子

初^{うい} 十代前半、源頼朝の長女、大姫

義高 十代前半、木曾義仲の息子

母 睡蓮の御方、四ノ宮の母親

宰相 四ノ宮の女房

納言 四ノ宮の女房

小弁 四ノ宮の女房

御台 初の母親

淡路 初の乳母

若狭 初の女房

次郎 義高の乳母子

小太郎 木曾の武士

五郎 木曾の武士

木曾義仲 源氏方の大将、義高の父

法皇 後に後白河と呼ばれる男

藤原基通 摂政

藤内光澄 鎌倉の武士

堀親家 鎌倉の武士

その他武士たち

《時・場所》

中世、日本。京のみやこと相模国鎌倉

プロローグ

スクリーンに以下の文字が映される。

「中世、日本。一一八〇年頃の晩い秋、夜」

「みやこの一隅にある、四ノ宮の住む屋敷」

ぼんやりとした明かりの中に四ノ宮と母が居る。病床の母が物語する声が聞こえてくる。

母

：『呪われるがいい愚かな獣物、オロチよ、お前にこのヒメは渡さない。』ミコトは怒りで体を震わせ、拳を握り締め、てびきました。そして、傍らで涙ぐむ姫にこう誓いました。『ご安心ください、私が守って差し上げます。あなたが化物の餌食になるなど決してあつてはならない。』ミコトは細くしなりやすいヒメの体を、風を抱えるようにそっと抱き寄せました。ヒメもされるまま、ミコトの胸に頬を埋めます。ミコトは更にこうおっしゃいました。『ああ、愛おしい清らかな姫、蓮の花のように美しい方。ご安心ください。ヤマタノオロチ、八つの尾と八つの頭、相手に取って不足はない、きつとしとめてみせましょう。』

ガタガタと戸が鳴り、風の気配がする。

母

「ヒメは心から安心しました。暮れ方になると、ミコトは里人に命じて甘い酒を入れた八つの瓶を用意させ、剣を手にして化物を待ちました。天空に月も星も光らない、真つ暗な晩でした。」

女房の宰相が、薬を持って入ってくる。四ノ宮、それに気づく。

母 「すると突然、闇の中から鬼火のように赤い光が、」

母上、薬が。

母 「光はちようど八組、それはオロチのまなこだとミコトは気づきました。燃え盛るまなこはぐんぐんと近づき、辺りにはもうもうと臭気が立ち始めます、その臭いはまるで、」

母上、おとぎ話はもうこれで、

おとぎ話？ オロチの話は王家の物語です。

母 宰相、

邪魔しないで乳母や。(四ノ宮に) 皇子のあなたが聞かなくてどうしますか？

母 皇子といつても私は四ノ宮です。

母 それはどうしたの？ あなたのお祖父様だって四ノ宮でした。けれど帝に即位され、今は尊い法皇様にあらせられる。引け目を感じることはない、卑下することはない、帝になる資格は十分にある。なのにあの平家が！

母 いいではありませんか、平家のことなど、なにがいいの？ どうしてあなたは怒らないの？ 私にはあなたの大人しさがもどかしくてたまらない。もつと怒りなさい、蔑みなさい。あのけがらわしい武士ども！ 殺生三昧のいやしい一族！ 強欲な男たち。あいつらがあなたを

母 四ノ宮の地位に蹴落としたのです。ええ悔しい、悔しくてたまらない。私という妃がありながら、生意気にもあなたのお

母 父様に平家の娘をあてがった。私を「睡蓮の君」とお呼びになり、「安心せよ」と、おっしゃったのは帝ですよ。平家は

母 その尊い意思を握りつぶし、お前を差し置き、あの女の腹か

母 ら生まれた子供、つまり平家の血筋を次の帝に即位させた。

母 四ノ宮

平家の！なんてこと、なんてこと。世の中が乱れるのも当たり前前だわ！
でも、

家柄は私が上、本来なら。そうよ、名門の妃が目障りで、病弱を理由にとうとう帝から私を遠ざけた、まるで疫病みたくに宮中から下がらせた。でも私には分かっている、この病も平家の仕業に違いない、平家が企てた呪いのせいには違いない。その証拠にこの薬だって、ちっとも効かないじゃありませんか。第一、平家がのさばる世の中だと思えば治るものも治らない。腹立たしい情けない生きている甲斐がない。殿上人も全て平家になびき、私達の前は素通り。おかげで毎日の暮らしに事欠き、あなたには皇子らしいことを何一つしてあげられない。もどかしい、もどかしくてたまらない。「安心せよ」と帝は何度もおっしゃった「安心せよ」と。どうでもいい、私などどうでもいい。あなたのことが気がかりなのです。あなたを支えるものは何？ この母ではない、気弱なお父様や平家べつたりのお祖父様でもない。まして異腹の兄弟とは言えかけて帝に心を許してはいけません、頼るなどもつてのほか。あなたに必要なのは物語です。王家の物語だけが、ミコトの血筋につながるあなたの尊厳を守るのです。

母、オロチを吐き出すような繰り返しが、やっと息が切れて話が止まる。

母 四ノ宮
母 宰相

さあお薬を、
続けて、オロチの話を。
奥様、
お願い、私の息子なら。

母 四ノ宮
母 四ノ宮
母 四ノ宮
宰相

お休みの時間です。
話してくれたら薬を飲みます。
まるで母上の方が子供だ。
オロチを倒したところから、
しかし、
乳母や、あなたからも言つて。
恐れながら宮様、

女二人に促され、四ノ宮が物語を始める。

四ノ宮

「酒を飲んで眠りこけたオロチの胴体を、スサノオノミコトは持っていた太刀で切り裂きました。すると刃が何かに当たり、見ると血まみれの体の中で、大きな剣が光り輝いていました。これこそが、」

母

これこそが「草薙の剣」またの名を「蛇の剣」といのです。ナギというのはオロチのもう一つの呼び名、蛇という字をあてるのです。その剣は生贄の結晶、涙の剣、恨みの刃。ミコトは犠牲になった娘たちを深く哀れんで、帝の守り刀と決めました。だから誰も「蛇の剣」には逆らえない。王族でさえも剣の前には無力です。あなたは以仁様を知っていますね？

母 四ノ宮

私の、
そう叔父様です。あの方も王家の一人。傲慢な平家のふるまいに耐えかね、兵を集めて六波羅を襲い、あつけなく返り討ちにあいました。

宰相
母 宰相
宰相
四ノ宮

あれ以来、この屋敷も見張られています。
恐れているのよ、王族の復讐を。
気味が悪いと女房たちがいつかなくて、
(宰相に) 手が足りないだろう、ここは私が、

宰相 いえそんな意味では、
母 以仁様のご無念いかばかり、
宰相 市中に晒されたようです、……ご遺体が。
四ノ宮 ご遺体？
母 首ね？
宰相 (頷いて) 目にしたそうです、納言が。

女房の納言、以仁の首を見ている。袖で口元を押さえる。

母 見せしめね。
宰相 酷いこと。
母 自業自得よ。
宰相 え？
母 以仁様が殺されたのは王家の物語を軽んじた当然の報いで
す。

納言が話す。

納言 見ちゃいました、私。というか目立つ場所に晒してたんで
す、平家が。……実際、向う見ずなことをしたものです。以仁
様の始めた戦のおかげで、都ではまた沢山の人が死にまし
た。平家は逆らうものを、容赦なく殺します、今までだって
：
宰相 (来て) ちよつと納言さん、向こうの用事はすんだの？ 戸
締りは？ 物騒なんだからねこの節、
納言 はいはい。
宰相 その態度。納言さん、ここは田舎じゃないのよ。畏くも宮家
の、

納言 その宮家がこんなに困ってるなんて、知りませんでした。
宰相 もともとお給金が少なくて、辞めたがってたみたいですね、
納言 みんな。以仁様の反乱がいい潮時だったって、
宰相 誰がそんな、
納言 私、事情を知らない田舎者だから、うっかりご奉公に上が
っちゃって、

宰相 納言さん、
納言 でも好きです、この職場。腐っても鯛、って言ったらなんだ
けど、歌の本や物語の冊子がどっさりあって驚いちゃった。

宰相 さすが、って感じ。女って、物語が好きじゃないですか？
納言 あたしは好き。だから宮様に許してもらって、ちよいちよい
眺めてるんです。あの方が物分りのいい、偉ぶらないお子さ
んだから助かっちゃう。
宰相 お子さん……(四ノ宮を見る)
納言 さん？
宰相 まだいとけないお年頃なのにひどく大人びて、それがまた
お可哀想で。

女房二人、母と子を見つめる。
四ノ宮と母。

母 今の平家は帝を手入れ、帝は「蛇の剣」に守られている。
四ノ宮 しかし「帝のしるし」というなら「玉」と「鏡」も同じこと。
母 三つの神器、しるしの内、なぜ殊更「蛇の剣」ばかりを、
宰相 帝の位を継ぐ皇子は、妃という生贄がなければ生まれ
ない。
母 オロチにのまれた娘の、堆積した悲しみの結晶が「蛇の剣」
なら、生まれた剣はまるで皇子、帝ご自身。剣と帝は表と裏、
宰相 陰と陽、二つが揃えばこそまことの帝なのです。「玉」や「鏡」
など添え物でしかない。ああ四ノ宮、平家に勝つため、あの
剣が必要なのです。 以下続く。